

鶴山書院報

第17号

公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地3 東原屋舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人
理事長 横尾俊彦



孔子生誕2575年に 生誕地曲阜を訪問

公益財団法人孔子の里
理事長 横尾 俊彦
(多久市長)

（多久市長）

孔子生誕2575年にあたる昨年秋、孔子生誕地・中国山東省曲阜市を訪問しました。新設の孔子博物館は壮大で、一筋の道を貫く孔子の生涯に思いを馳せました。館内では有名な「魯壁」再現展示も拝見しました。秦始皇帝の焚書坑儒に抗い、貴重な文書（竹簡）を塗り込み守った赤い壁です。このお陰で現代の私達は四書五経などの聖典を繙けます。これまでの数知れぬ艱難克服と貢献に感謝し、大いに学び実践せねばと思いました。郭館長との対談では、昨春の孔垂長氏の多久来訪に同行予定だったとのことで、多久訪問を希望されていました。

孔子が誕生した夫子洞は市街地から離れた尼山の東麓にあり、現地に新築された大講堂での開幕式では五か国の孔子廟も紹介され、

多久聖廟を擁する多久市の市長・公益財団法人孔子の里理事長として挨拶できました。

生誕日

9月28日は曲阜市街地中心部にある孔廟での釋奠。

多くの国からの招待者が分乗

したバス数十台の隊列は壯觀です。大成路通

りで降車し、神道路を孔廟まで一キロ程歩きました。途中には論語朗唱の演出もある熱烈

歓迎です。釋奠の祭典にも現代風の演出も加味され、北京紫禁城を彷彿とさせる威風堂々

の曲阜孔廟が青空に映えました。

午後のシンポジウムで多久聖廟と多久市について講演しました。多久茂文公の志、聖廟創建と祭祀、孔子の教えを継承する多久町や

多久市の人々、論語かるたに興じ学ぶ多久の子どもたちに称賛の声もありました。儒学が日本文化の中で尊重され、人格陶冶などにも活かされていることを発信できました。

10月には北京の国際儒学学会に招聘され、ご長寿だった孔子直系七十七代子孫孔徳懋先生の墓参に赴き、ご子息の柯達さんと一緒に献花して、御靈の安寧を祈りました。

孔子直系子孫孔垂長先生や徳懋先生が尊重された「恕」の心と実践の大切さを改めて広め、平和・幸福の叶う世にしたいものです。



「腰鼓のひびき」（長崎県 鈴木寛太郎）
多久百景写真コンテスト入賞作品

〔特集〕 第27回全国ふるさと漢詩コンテスト

江戸時代、多久のやきものの生産

佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問

大橋 康二

草場佩川の『山野一善』（其の三）

佐賀大学 教授 中尾友香梨

多久家文書『水江事略』（翻刻文）紹介

公益財団法人孔子の里理事 服部 政昭

華表を仰ぐ（第四回）

多久市郷土資料館長 藤井 伸幸

鶴山塾案内

令和6年度

多久市市制施行70周年記念事業

第27回 全国ふるさと 漢詩コンテスト



多久市制70周年
TAKU CITY 70th ANNIVERSARY

27回目を迎えた全国ふるさと漢詩コンテスト。今回は、多久市制70周年記念事業の一環として実施し、令和6年11月30日、多久市東原庠舎講堂において表彰式及び公開講演会を開催しました。

この漢詩コンテストは、儒学と文化の里づくりを目的に、江戸時代の郷校東原庠舎で学ばれていた国学や漢詩に親しんでいたところと平成10年に始まったコンテスト。現在は、国内の漢詩大会の中でも折りのコンテストと言われるようになりました。

今回は、「家族」をテーマに募集。応募者総数は132名、応募作品数は192点でした。全国31都府県に加え、台湾からの応募もありました。

応募作品は、大木康先生（東京大学名誉教授）、鷺野正明先生（国士館大学名誉教授）に審査いただき、最優秀賞に千葉県南房総市の在原隆裕様の『夏夜寄弟』が選ばれました。

最優秀賞の作品を陶板に刻んだ石碑を多久聖廟参道脇に建立し、同日、皆様に披露させていただきました。

表彰式に併せ、公開講演会を開催しました。宇野茂彦先生（中央大学名誉教授、公益財団法人斯文

会理事長）を講師に招き、『正名（孔子の政治思想）』と題し、ご講演いただきました。

『正名』とは、「名を正す」という行為のこと。宇野先生は、講演の中で、論語の中で示されている「政治において最優先にすべきである行為である『正名』と「言葉の混乱を正す行為である『正名』について解説いただきました。

孔子の政治思想における『正名』は、「徳治による統治論で、徳のある統治者が持ち前の徳をもつて人民を治めること」と説明され、論語の中で語られている例を示し、「徳治により、秩序正しく世の中が治まる」との孔子の思想について述べられました。

また、孔子が言う「言葉の混乱を正す行為」についても、論語の例を挙げ、事柄に対する正しい名称の与え方の重要性について述べられました。

近年の政治や報道における日本語の名称の与え方の問題点や、そのことによる誤解や常識が通用しない社会への変化の徵候を示し、「名を正している」とは言えない今の日本語の現状についても話されました。



▲(右から) 斎藤昌枝様(優秀賞受賞)、近藤様令夫人、近藤俊彦様(優秀賞受賞)、宇野茂彦先生、横尾俊彦市長、高山一雄様(入選受賞)、高山様令夫人、石田俊二教育長

最優秀賞

夏夜弟に寄す

千葉県南房総市 在原 隆裕

夏夜寄弟

在原 隆裕

晩来涼味浪声中

晩來の涼味浪声の中

滅燭開窓海月空

燭を滅し窓を開けば海月空し

聞道武城炎暑酷

聞道武城炎暑酷しと

為君欲送故鄉風

君が為に送らんと欲す故郷の風

講評

難しい漢字を使わず、思いを素直に詠つている。承句の「空し」は弟のいない寂しさを表し、転句の「武」は炎暑の酷さを強調する。そこで結句で、故郷の風の涼しさと、弟を思う作者のやさしい気持ちが、爽やかに吹きわたる。

入賞作品



公開講演会（講師：宇野茂彦先生）



最優秀賞の漢詩碑

優秀賞

冬日閑居

近藤俊彦

幽林葉盡秀孤峰

幽林葉は尽きて孤峰秀で

庭上霜新入孟冬

庭上霜は新たにして孟冬に入る

翁媼襲衣爐畔坐

翁媼衣を襲ねて爐畔に坐し

茗茶時煮夕陽春

茗茶時に煮れば夕陽春く

講評

衣を重ね、囲炉裏端で老夫婦が茶を飲む。外は夕陽が沈みゆき、山が紅く照らされている。起句の「孤峰秀づ」がここで効いてくる。木々の葉が落ち尽くし霜がおりる冬の、心温まる閑かな暮らし。作者の孤高の気も感じられる。

優秀賞

夜 家書を読む

栃木県下野市 斎藤 昌枝

夜讀家書

斎藤 昌枝

初出家鄉百日餘

初めて家郷を出て百日余

遙看孤月夜窓虛

遥かに看る孤月夜窓虚し

開封一笑且垂淚

开封一笑且つ涙を垂る

問我平安他不書

我に平安を聞いて他書かず

初めて故郷を離れて、ひとり住まい。家から手紙が来たが「無事か」とだけ書いてある。それが可笑しくて、しかし、やさしさに涙がこぼれる。前半に「百日餘」「孤月」「夜窓虚」というのが、後半に効いている。

冬日閑居

大分県津久見市 近藤 俊彦

人選

団欒即事

新潟県新潟市 渡辺 敦

秋日懷先考

高山一雄

山梨県都留市 高山一雄

人選

秋日先考を懷う

入選

遊子吟

遊子吟
岡田 讓

東京都渋谷区 岡田 让

早歲辭親別故山
最欣家信到柴關

早歲親を辭して故山に別れ
最も欣ぶ家信柴闌に到るを

開封密密滿箋字
合眼分明慈母顏

封を開けば密密たり満箋の字
眼を合すれば分明なり慈母の顔

元朝祈健賽神祠
麗日春裝瑞氣滋

元朝健を祈り神祠に賽す
麗日春裝瑞氣滋し

孫子勞吾晴暖路
那邊鳥轉步遲遲

孫子吾を労る晴暖の路
那邊鳥は轉り歩すること遅々たり

(講評) 日本全国に見られる地方の過疎化。こうしたなかでも、長年の苦労を笑つて語りあう親戚一同の団欒がある。承句の「今夜爐邊談笑長し」が大切な句。

布衣汗滴幾星霜
休道地偏人口減
血縁相伴老家鄉

布衣汗は滴る幾星霜
道うを休めよ地偏人口減ずと
血縁相伴うて家郷に老ゆ

(講評) 夫が亡くなつて二年経つのに、健忘症の母は、夫は野良仕事から帰つて来たかと問う。承句と結句に陶淵明の句を用いている。

先公去後過三秋
往日農耕南北疇

先公去りし後三秋を過ぐ
往日農耕南北の疇

慈母健忘今尚問
荷鋤帶月已歸不

慈母健忘今尚お問う
鋤を荷い月を帶びて已に帰るや不や

奨励賞

拜歲有作

副島陽子

佐賀県佐賀市 副島陽子

元朝祈健賽神祠
麗日春裝瑞氣滋

元朝健を祈り神祠に賽す
麗日春裝瑞氣滋し

孫子勞吾晴暖路
那邊鳥轉步遲遲

孫子吾を労る晴暖の路
那邊鳥は轉り歩すること遅々たり

(講評) うららかな元旦に春の装いに身をつみ初詣に行く。孫が心配してくれて、参道をゆっくり歩くと、どこかで鳥が囁いている。暖かな日ざしがぼのぼのと家族を照らし出し、鳥も祝つてくれているようである。

先公去後過三秋
往日農耕南北疇

先公去りし後三秋を過ぐ
往日農耕南北の疇

慈母健忘今尚問
荷鋤帶月已歸不

慈母健忘今尚お問う
鋤を荷い月を帶びて已に帰るや不や

(講評) 故郷の母から手紙が来た。便箋いつぱいに、こまごまと書いてある。目をつぶると母のやさしい顔が浮かぶ。「密密」とあると、孟郊の「遊子吟」が連想される。

(講評) うららかな元旦に春の装いに身をつみ初詣に行く。孫が心配してくれて、参道をゆっくり歩くと、どこかで鳥が囁いている。暖かな日ざしがぼのぼのと家族を照らし出し、鳥も祝つてくれているようである。



表彰を受ける高山一雄様(右)



表彰を受ける斎藤昌枝様(左)



表彰を受ける近藤俊彦様(右)

全国ふるさと漢詩コンテストのあゆみ



令和5年度



平成4年度



令和3年度



令和2年度



令和元年度



平成30年度



平成29年度



平成28年度



平成27年度



平成26年度

回 数	テーマ	応募 作品数	最優秀賞受賞者
第1回 平成10年度	ふるさと	221	増田 泰之 (埼玉県)
第2回 平成11年度	とき (時)	309	木村 美奈 (佐賀県)
第3回 平成12年度	空 (そら・くう)	264	藤川俊二郎 (長崎県)
第4回 平成13年度	自然	290	高山 一雄 (山梨県)
第5回 平成14年度	美しい自然をたたえて	317	上野 一馬 (岐阜県)
第6回 平成15年度	わが故郷の山・川	271	横山 英子 (東京都)
第7回 平成16年度	花	307	宮本 大典 (東京都)
第8回 平成17年度	月	301	井上 正一 (大阪府)
第9回 平成18年度	舟遊	289	杉村 幸雄 (鹿児島県)
第10回 平成19年度	海	251	大桶 敏子 (栃木県)
第11回 平成20年度	旅 (たび)	274	堀田 政次 (愛知県)
第12回 平成21年度	故里の秋	266	日原 傳 (東京都)
第13回 平成22年度	風	276	古賀千恵子 (佐賀県)
第14回 平成23年度	秋を詠う詩	250	古田 光子 (神奈川県)
第15回 平成24年度	鳥	219	中山 慶司 (滋賀県)
第16回 平成25年度	酒 又は 茶	235	山田 治 (東京都)
第17回 平成26年度	雲	282	阿部 清澄 (大分県)
第18回 平成27年度	川 又は 湖	338	池上 一利 (東京都)
第19回 平成28年度	夏	346	副島 陽子 (佐賀県)
第20回 平成29年度	樹 又は 草	329	大森 一廣 (福岡県)
第21回 平成30年度	夜 又は 宵	363	川端 恵美 (兵庫県)
第22回 令和元年度	廟、寺、祠 (神社)	268	小嶋明紀子 (神奈川県)
第23回 令和2年度	音 又は 声	289	高山 一雄 (山梨県)
第24回 令和3年度	橋 又は 橋梁	237	平塚 純造 (埼玉県)
第25回 令和4年度	雨	250	岡田 讓 (東京都)
第26回 令和5年度	宿	218	田沼 裕樹 (千葉県)
第27回 令和6年度	家族	192	在原 隆裕 (千葉県)



平成25年度



平成24年度



平成23年度



平成22年度



平成21年度



平成10年度



平成11年度



平成12年度



平成13年度



平成14年度



平成15年度



平成16年度



平成17年度



平成18年度



平成19年度

江戸時代、多久のやきもの生産

佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問 大橋 康二

— 肥前陶磁器の歴史の中で、多久のやきもの生産はどのような役割を果たしたか —

肥前陶器、すなわち唐津焼の始まりは一五八〇年代頃に遡る。豊臣秀吉の下で家の存続のために茶のかせたのである。ところが、間もない文禄の役に従軍した波多親は秀吉の逆鱗に触れ、文禄二年（一五九三）改易された。保護者を失った朝鮮陶工たちは離散し、その後の陶器窯は伊万里・武雄・多久などに拡がる。主に佐賀領内に拡がるが、それには慶長の役で一五九八年に連れ帰られた朝鮮の陶工も加わったと推測される。鍋島軍に連れ帰られた朝鮮陶工（記録に焼物上手の者六、七人）の中に磁器の技術を持つ技術者がいた。多久安順の下にいて、唐人古場窯で陶器焼成を試みたことが窯跡の調査で分かった。唐人古場窯の窯構造は韓国の白磁窯のそれに極めて近い構造を持つ。また、陶器の碗皿はそれまでの岸岳以来の陶器とは異なる高台部まで施釉した陶器であった。

次に、多久の当時「本皿屋」と呼ばれていたと考えられる、現在、高麗谷窯と名づけられた窯に移る。ここでは、すでに絵唐津などが焼かれていたが、そこに、それまでなかつた磁器の技術で、おそらく少しが出土品からわかる（図1）。それとともに、そ

れまでの肥前陶器生産にはなかつた朝鮮の陶器技術で白土を使つた刷毛目と象嵌装飾の陶器を作り出すことも出土品からわかる。そのように朝鮮の技術で新たな陶磁器製作を行つたと推測される金ヶ江三兵衛集団は佐賀藩主の命で伊万里の藤川内に移るのである。

藤川内の鞍壺窯で染付磁器が出土しているので、朝鮮の陶工は母国では文様のない白磁のみを作つていたが、日本の消費者が中国の染付のように青い文様を描いた磁器を求めるので、藤川内で中国船からコバルト青料（呉須という）を入手し、染付磁器の試験焼成を行つたものと推測される。ここでも、併せて朝鮮で作られていた白土を使つた刷毛目の陶器や型紙摺りによる白土文様の陶器が出土している。

その上で豊富な磁器原料があると知つて有田の小溝に移る。それが金ヶ江三兵衛の記録から一六一六年と推測されるのである。小溝窯の調査で砂目積みの陶器とともに多くの染付磁器が出土しており、しかも、型打ち成形という、中国景德鎮窯が行つていた成形法を取り入れた染付を作ることで、相対的に高級品を作る。一方で、中国でもより粗製といわれる染付を福建漳州窯で十六世紀中葉以降作り、日本にも景德鎮の染付と一緒に輸入されていたものと同様の、見込み蛇目釉剥ぎという窯詰め法（図2）で直

接小皿同士を重ね積み焼成する。この方法で一度に大量の磁器を焼き、より安価な染付小皿を作るのである。型打ち成形も蛇目釉剥ぎによる重ね積み法も、朝鮮では行つていなかつた方法であり、有田が中国磁器と競争するため採用したのであり、本格的磁器生産に入ったのは、この有田・小溝段階からといえる。よつて、日本の磁器の始まりは一六一〇年代に有田あたりで始まつたと考えてきたのは妥当といえる。

「多久家有之候御書物写し」（佐賀県立図書館蔵）により金ヶ江三兵衛が多久から有田に一六一六年に入つた時に同行した陶工は一八人と読み取れる。皆口クロ細工ができるとある。その後に三兵衛が雇用したものとして、佐賀藩家臣高木権兵衛（知行四〇六石）のうちの唐人子四人、千布平右衛門（一六五年物成二十二石）のうちの唐人子三人、有田百姓の子兄弟二人、伊万里町助作、合わせて十人である。さらに所々より集まつた者百二十人が一六五三年までに加わつたと記される。多久の『御屋形日記』元禄十年（一六九七）七月二十三日に多久茂文家来として有田の上幸平町金ヶ江孫兵衛、大樽山徳永孫右衛門、本幸平山金ヶ江万左衛門、白川山金ヶ江三左衛門、稗木場山金ヶ江三兵衛、同所同二左衛門、赤絵町金ヶ江弥次右衛門、同所同佐左衛門、以上八人が記され、多久家家来として金ヶ江一族が有田皿山の磁器生産に重きをなしていたことがわかる。

この有田磁器生産が飛躍的に発展する原因是、一六四年、中国の明清王朝交替に伴う内乱で中国磁器のわが国への輸入が激減したことである。このチャンスに肥前磁器生産は生産量を増大させ、一気

に国内磁器市場を独占したのである。それだけではなく、中国の技術を導入し、色絵をはじめとする著しい技術革新を果たす。また、早くも一六四五年から四七年には中国磁器に代わって東南アジアへの海外輸出を始める。この海外輸出は一六五九年からはオランダ東インド会社による本格的な欧州までの世界規模での輸出が始まる。このいわば輸出景気を事前に察知した佐賀藩は赤絵業者を一か所に集めて赤絵町を設置し技術の秘密保持のため管理を強めた。この輸出景気も一六八四年中国の内乱が終わり、清朝が貿易の禁止を解除する展海令を発布すると、再び中国磁器が世界に輸出され、たちまち東南アジア市場などは中国に奪回される。肥前磁器生産は海外市場の減退により、国内市場の開拓に乗り出す。その状況で多久領内でも陶器生産が始まる。

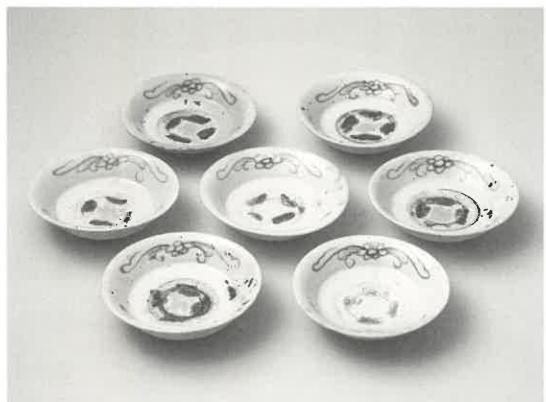
保四郎窯であり、白土による刷毛目装飾を施した片口鉢や徳利などが多く作られた。また口縁部に鉄釉を掛けた擂鉢も多い。少量ながら、刷毛目の碗や、刷毛目の中皿もみられる。刷毛目の蓋付鉢も出土している。珍しいものでは鉄釉の耳付鍋がある。保四郎窯での陶器生産は十七世紀末～十八世紀前半の中で行われたと推測される。多久で同じ頃に陶器生産を行つたと考えられるのは大山古窯である。刷毛目陶器碗が比較的多いし、その一種で外面に白い丸を表し、螢手と呼ぶ装飾の碗もある。特殊なものでは鉄釉を掛けた陶器平皿がある。これは朝鮮通信使の接待用食器の中にみられる器種の一つであり、漆器の器形からくるものと推測され、日常より儀礼的な場で使う用途が推測される。これに続くと考えられる鉄釉の平皿は愛媛県の砥部町北川毛窯で十八世紀

後半にかけて作られている。

一六八四年以降、欧州市場で中国景德鎮と競争した有田磁器も、一七五七年でオランダによる公式輸出が終わる。海外市场を失った肥前磁器生産は当然大打撃を受けたものと考えられる。長崎県波佐見諸窯は一六八四年以降、東南アジア市場を失い、国内市场のそれまで磁器の食器を使えなかつた庶民層でも買うことができる安価な磁器製作に棍を切つていく。十八世紀中頃には徹底的にコストを下げる厚手の染付碗・皿を作り出し、それが全国津々浦々に流通するようになる。全国の遺跡出土状況からみて、十八世紀後半には今と同じように誰でもが磁器碗で食事ができるようになつたものと推測できる。その影響を受けて陶器の食器を生産していた多久の保四郎窯、大山古窯なども、長崎の現川窯などと同様に、陶器需要の減少で廃窯に追い込まれたものとみられる。そして、福岡の須恵焼など、各地で磁器の食器生産が始まると、肥前でも嬉野の内野山が陶器生産に代わり、磁器を焼きたいと藩に願い出て、磁器焼成を始めるなどが進む中、多久の大山でも大山新窯が一八一三年に開窯し磁器の食器生産が行われた。記録から一八一三年開窯と推測できるが、廃窯時期は製品の内容が広東窯（図3）と呼ばれる飯碗が主に出土し、肥前ではより新しい一八二〇年代からの飯碗である端反碗が少量みられることから一八二〇年代頃に廃窯と推測できる。結果として、全国各地で磁器の食器生産が活発に行われる中、短期間で経営に失敗したものと考えられる。



【図1】高麗谷窯 白磁碗
多久市教育委員会蔵



【図2】染付花唐草文小皿
佐賀県立九州陶磁文化館蔵
柴澤コレクション



【図3】大山新窯 染付広東碗
多久市教育委員会蔵

草場佩川の『山野一善』（其の二）

佐賀大学 教授 中尾友香梨

（大意）雄山君の父玄山君は、職務の合間に、禅を独学した。そしてあるとき即非禪師を招いて教えを請い、すぐに悟りの境地に入つた。それ以後、即非禪師にたずねたいことがあれば、側近の藤井内記を豈前の大廣寿山福聚寺に遣わした。当時、僻地ではまだ儒学が行われておらず、そのため道を求めて禅に入るには、成り行きとしてやむを得ないことであつた。昔から、賢くて道理に明るい人物や並みすぐれた英傑たち、たとえば平重盛、万里小路藤房、源顯基、楠木正成などの諸公も、儒学が世に行われない時代に遭遇したので、また同じく禅に入つた。玄山君の参禅が、形を変えて跡継ぎ（雄山君）の道（儒学）のもとになつたのかもしれない。

（大意）雄山君の父玄山君は、職務の合間に、禅を独学した。そしてあるとき即非禪師を招いて教えを請い、すぐに悟りの境地に入つた。それ以後、即非禪師にたずねたいことがあれば、側近の藤井内記を豈前の大廣寿山福聚寺に遣わした。当時、僻地ではまだ儒学が行われておらず、そのため道を求めて禅に入るには、成り行きとしてやむを得ないことであつた。昔から、賢くて道理に明るい人物や並みすぐれた英傑たち、たとえば平重盛、万里小路藤房、源顯基、楠木正成などの諸公も、儒学が世に行われない時代に遭遇したので、また同じく禅に入つた。玄山君の参禅が、形を変えて跡継ぎ（雄山君）の道（儒学）のもとになつたのかもしれない。

（大意）雄山君の父玄山君は、職務の合間に、禅を独学した。そしてあるとき即非禪師を招いて教えを請い、すぐに悟りの境地に入つた。それ以後、即非禪師にたずねたいことがあれば、側近の藤井内記を豈前の大廣寿山福聚寺に遣わした。当時、僻地ではまだ儒学が行われておらず、そのため道を求めて禅に入るには、成り行きとしてやむを得ないことであつた。昔から、賢くて道理に明るい人物や並みすぐれた英傑たち、たとえば平重盛、万里小路藤房、源顯基、楠木正成などの諸公も、儒学が世に行われない時代に遭遇したので、また同じく禅に入つた。玄山君の参禅が、形を変えて跡継ぎ（雄山君）の道（儒学）のもとになつたのかもしれない。

この一段では、茂文の養父であり第三代領主である多久茂矩（一六三〇～九〇）のこと記している。玄山は茂矩の戒名である。

即非和尚とは、黄檗僧・即非如一（一六一六～七二）のことである。明の福建出身であるが、先に来日した隱元隆琦（一五九二～一六七三）の招きに応じて、明暦三年（一六五七）二月に弟子千呆性俊（一六三六～一七〇五）らをつれて来朝し、長崎の崇福寺に住した。寛文三年（一六六三）八月、師の隱元が宇治に土地を拝領し、黄檗宗の總本山万福寺を開いたことを祝うため、長崎を発つて宇治へ向かう。小倉で藩主小笠原忠真の歓待を受けており、翌四年（一六六五）四月に、小笠原家の菩提寺・廣寿山

（大意）宝永年初、雄山君、諱茂文、惣先聖廟。邑人或曰、其所祀、果何靈。君曰、欲知神名、第呼曰護持仁義之神、可也。

（大意）宝永年の初め、雄山君、諱茂文、先聖廟を惣む。邑人、或いは曰く、「其の祀る所、果たして何の神ぞ」と。君曰く、「神名を知らんと欲せば、第だ呼びて仁義を護持するの神と曰えば、可なり」と。

（大意）宝永年間の初頭、雄山君（名は茂文）は聖廟を創建した。村人は大概「そこに祀られているのは、いったい何の靈でしょうか」とたずねた。雄山君は「神の名が知りたければ、ただ仁義を守護する神と呼べばいいのだよ」と言つた。

（大意）君父玄山君、職務之暇、以禪學自修。嘗請致即非和尚、翛然悟人。爾後、欲有參問、使侍人藤井内記屢往豊之広寿。當時僻鄉儒學未行、故求道入禪、勢不得已。自古賢明英偉、如小松内府及万里、黃門、楠河州諸公、當聖學否塞之日、往々亦然。君子之參禪、安知不為嗣君、一變至於道之基。

（大意）君父玄山君、職務の暇、禪學を以て自修す。即非和尚を請致して、翛然として悟入す。爾後、參問すること有らんと欲せば、侍人の藤井内記をして屢しば豊の広寿に往かしむ。當時、僻鄉に儒學未だ行われず、故に道を求めて禪に入るは、勢い已むを得ず。古えより賢明英偉、小松内府、及び万里、黃門、楠河州諸公の如きも、聖學否塞の日に当たり、往々にして亦然り。君の參禪、

（大意）茂文は佐賀藩三代藩主・鍋島光茂の三男として生まれ、多久二代藩主茂矩の養子となり、貞享二年（一六八六）に十八歳で家督を継いだ。元禄十二年（一六八九）に学問所（のち東原庫舎）を設け、宝永五年（一七〇八）に儒學の祖・孔子を祀る聖廟を創建した。

（大意）聖廟を創建した当初、村人たちはまだ儒學も孔子と理解し、聖廟に祀られているのが何の神であろうかと不思議がつた。そこで聖廟は神社ではないと説明しても、村民には理解できないと考えた茂文は、あえて村民の理解を否定することなく、「神の名が知りたければ、ただ人情と義理を守つてくださる神と呼べばいいのだよ」と、領民に伝わりやすい言葉で表現したという話である。続きを読むよう。

（大意）この一段では、茂文の養父であり第三代領主である多久茂矩（一六三〇～九〇）のこと記している。玄山は茂矩の戒名である。

即非和尚とは、黄檗僧・即非如一（一六一六～七二）のことである。明の福建出身であるが、先に来日した隱元隆琦（一五九二～一六七三）の招きに応じて、明暦三年（一六五七）二月に弟子千呆性俊（一六三六～一七〇五）らをつれて来朝し、長崎の崇福寺に住した。寛文三年（一六六三）八月、師の隱元が宇治に土地を拝領し、黄檗宗の總本山万福寺を開いたことを祝うため、長崎を発つて宇治へ向かう。小倉で藩主小笠原忠真の歓待を受けており、翌四年（一六六五）四月に、小笠原家の菩提寺・廣寿山

（大意）雄山君の父玄山君は、職務の合間に、禅を独学した。そしてあるとき即非禪師を招いて教えを請い、すぐに悟りの境地に入つた。それ以後、即非禪師にたずねたいことがあれば、側近の藤井内記を豈前の大廣寿山福聚寺に遣わした。当時、僻地ではまだ儒学が行われておらず、そのため道を求めて禅に入るには、成り行きとしてやむを得ないことであつた。昔から、賢くて道理に明るい人物や並みすぐれた英傑たち、たとえば平重盛、万里小路藤房、源顯基、楠木正成などの諸公も、儒学が世に行われない時代に遭遇したので、また同じく禅に入つた。玄山君の参禅が、形を変えて跡継ぎ（雄山君）の道（儒学）のもとになつたのかもしれない。

福聚寺を豊前に開く。(森鷗外の「即非年譜」、森鷗外著作集『阿部一族』豊前小倉版第二集所収)

多久茂矩が即非を招いて教えを請うたのは、寛文三年(一六六三)八月、即非が長崎から宇治へ向かい、佐賀城下を通過するときのことであつただろう。そして即非が福聚寺の住持になつた後も、茂矩はしばしば側近を豊前に遣わして禪の教えを請うたという。

小松内府は平清盛の長男重盛(一一三八~七九)。平家が政権をとつた後、重盛は内大臣に任命され、京都六波羅館(平家の邸宅群)の小松の館に居住したことから、小松内府と称された。内府は内大臣の唐名である。

万里は万里小路藤房(一二九五~?)。鎌倉時代末から南北朝時代にかけての公卿であり、後醍醐天皇の側近として倒幕運動に参画した。柳川藩の藩儒安東省菴(一六二二~一七〇一)によつて、平重盛・楠木正成と共に日本三忠臣の一人に数えられた。

黄門は中納言の唐名。中国の宮中の門が黄色に塗つてあつたことから、皇帝に近侍する官職を「黄門侍郎」と言い、日本では中納言がこの官職にあることから「黄門」と称した。ここでは源顯基(一〇〇〇~四七)。後一条天皇に仕え、官位は権中納言に至つたが、天皇の死後、「忠臣は二君に仕えず」として出家した。

楠河州は楠木正成(一二九四~一三三六)。河内守に任せられたことから「楠河州」と称された。「州」は国の意である。

右四人はみな一代の英傑であるが、彼らの生きた時代には、まだ儒学が世に行われていなかつたので、彼らは道を求めて禪に入つた。多久茂矩が禪を学んだのも理由は同じであり、その禪に向かうひたむき

さが、形を変えて、次の代の茂文が儒学を求める基礎になつたかもしないと、佩川はいう。

○鳳山君、養病不朝久矣。寛延初、將有事于諫早。飛能驚人者、吾於君与觀之。

鳳山君、養病して朝せざること久し。寛延の初め、将に諫早に事有らんとす。君起ちて奉命し、一矢も費さずして、以て國難を靖む。所謂「此の鳥飛ばず、飛べば能く人を驚かす」とは、吾れ君に於いて之を観る。

(大意)鳳山君は、病氣療養のため長い間、藩の政治に携わらなかつた。寛延年間の初頭、諫早一揆が起きた。鳳山君は藩命を受けて鎮圧に出向き、一本の矢も費やすことなく、国難を回避した。いわゆる「此の鳥飛ばず、飛べば能く人を驚かす」ことを、わたしは鳳山君に見た。

この一段では第七代領主・多久茂堯(一七一六~一七六九)のことを記している。鳳山は茂堯の戒名である。茂堯は家督を継ぐ前の元文三年(一七三八)、一年だけ請役家老を務めたことがあるが、それ以後は請役からはずされていた。佩川の右の記述によれば、病弱が理由のようである。

しかし寛延元年(一七四八)に諫早一揆が起き、藩は茂堯に鎮圧を命じた。茂堯は斥候(密偵)を諫早へ送り、状況を探らせた。その一人が石井鶴山の父忠貫であった。密偵の報告をもとに、茂堯は約五百人の軍勢を率いて出陣し、首謀者とされる儒者若杉春后と百姓数十人を捕らえ、家老と用人に切腹を命じて引き上げた。「一矢も費さずして、以て国難

を靖む」とは、このことをいう。

所謂「此の鳥飛ばず、飛べば能く人を驚かす」とは、

『史記』楚世家に見える故事をいう。後に春秋五霸の一人に數えられる楚の莊王は、即位して三年間、まともに政治を行おうとせず、そのことを注意する

家臣がいれば処刑すると公言していた。見かねた家臣の伍拳が莊王に、「丘の上に鳥がいますが、三年間蜚ばず鳴かずです。いつたい何の鳥でしょうか」と謎かけをした。莊王は「三年も蜚ばず鳴かずの鳥は、ひとたび飛べば天を突くかのように高く飛び、ひとたび鳴けば人を驚かすほどの勢いだらう」と答えた。そこへ蘇従(そしゆう)という家臣も入つて来て、莊王を諫めた。王は彼らの忠誠に感じて、翌日から政務に励み、伍拳と蘇従を重用したという。

似たような故事は、『史記』滑稽伝・淳于髡や『呂氏春秋』重言などにも載つており、大いに活躍する機会を待つて、長い間じつとしていることをいう。しかし現在では、長い間何の活躍もしないでいることを自嘲的に、または軽蔑していることが多い。佩川はもちろん前者の意味で、この故事を用いている。

ちなみに諫早一揆が鎮圧された後、佐賀藩に身柄を引き渡された諫早家の上級家臣五名、百姓十八名、町人二名、計二十五名は、同年十月二十六日に嘉瀬橋のほとりにあつた刑場で処刑され、多久に身柄を預けられていた五名は、佐賀藩の命により十一月九日に志久村で処刑された。

一方、多久茂堯は諫早一揆鎮圧で大役を果たしたことを家臣たちが自慢しないように戒めており、後年、南多久の桐野山妙覺寺の境内に犠牲者を供養する諫早墳を建てた。

同十五日内府公伏見御進發有テ関東ニ下向シ玉
フ直茂公ヨリ御願有テ藤八郎君ト勝茂公関東ニ
御陣ニ從ハルヘシトノ御議定ナリ
高房公勝茂公先京都ニ赴キ玉フ我公是ニ從フ直
茂公ハ西國ニ御下リ茂富公御供ナリ我公ニ從ヒ
上方ニ在ル御家臣ノ面々龍造寺三次郎カ陣代本
覺坊澄仙犬塚半左衛門南里三郎左衛門吉岡平左
衛門龍造寺七兵衛物頭ニハ木下久兵衛(旗奉行)
徳永八郎左衛門田代次郎左衛門原千右衛門西岡
覺右衛門成富權右衛門梶原喜兵衛(以上六人弓
鉄砲頭)其他南里與左衛門石井源左衛門同三右
衛門蒲原清左衛門相浦左近允福地右衛門同内蔵
助副嶋四郎兵衛徳永二左衛門同金右衛門木下七
郎右衛門土橋喜左衛門木下覺左衛門村山吉左衛
門中嶋權右衛門野田清兵衛同勝右衛門金原加右
衛門武富助右衛門岩本久菴江原軍助大河内五右
衛門山田長右衛門小柳次郎左衛門等ヲ始トシテ
兵卒都合六百餘人ナリ

七月両公軍ヲ率ヒテ内府公ノ御跡ヲ追テ関東ニ
赴カル(故有テ京都ニ暫ク御滞留)江州愛智川
ニ到リ玉フ石田治部少輔此所ニ新関ヲ居ヘ関東
下向ノ兵ヲ差留メ且告テ曰内府家康去々年以來
上巻ノ誓紙ニ背カレ恣ノ働く多故殿下ノ御遺言
ニ背カルヽ以テ當君秀頼公其罪ヲ糺サレン為
誅伐ヲ加ヘ玉フモノナリ仍テ五畿内四國九州ノ
候伯関東ニ赴ク者一人モ差通スペカラストノ命
ナリト云々三成ノ兄石田奎頭正澄(或ハ重成)
佐和山ヲ守ル其兵一万餘騎トソ聞ヘシ是ニ依テ
諸将志ヲ内府公ニ通シ御跡ヲ慕フテ関東ニ下向
スルモノ多シトイエトモ秀頼公ノ嚴命トアレハ
遁レ難ク皆大阪ニ引返サル三成禪僧菊主座(一
ニ安國寺ニ作ル)ヲ遣シ再三両公ヲ留ム是ニ依
テ両公老臣等ヲ集メ當節ノ義何レニ決セラレ然
ルヘキヤト議セラル皆曰母公今質トシテ大阪ニ
在ス直茂公爰ニアラハ當関ヲ打破リ関東ニ押通
リ玉ハシ事疑ヒナシ是妻子ヲ捨テ弓矢ノ本意ヲ

達スル事古今例多ケレハナリ然共公ニ於テハ是
ニ同シカラス秀頼公ヲ後ニシ母公ヲ捨ラレテハ
何ソ弓矢ノ冥加ニ叶ハンヤ今覗面ノ道理ニ就テ
先上方ニ御歸アランヨリ外ナシト云々是ニ依テ
兩公軍ヲ返シテ八日市ニ到ル放鷹游獵シテ御滞
留アル事三ヶ日ナリ是ハ東西ノ落著ヲ猶又御聞
合セアラン為ナリトソ爰ニ於テ大坂ノ大老毛利
輝元浮田秀家及ヒ五奉行ヨリノ奉書到来シテ伏
見城攻ノ催促アリ仍テ両公毛利豊前守吉政(一
ニ勝永トモ)ト共ニ大阪ニ歸ラル(家系事績ニ
毛利勝信ハ高房ノ姉婿ナリト)毛利輝元内府公
ノ留守居佐野肥前守ヲ追退ケ自ラ移テ西丸ニ居
リ内府公ニ代テ天下ノ成敗ヲ掌ル同月下旬大坂
ノ諸軍伏見ニ向フ金吾中納言秀次ヲ惣大將トシ
テ相從フ諸将ニハ羽柴薩摩ノ侍從義弘同又七郎
忠恒嶋津中務太輔家久(或ハ豊久又義家トモ)
龍造寺簾八郎高房公鍋嶋信濃守勝茂公毛利豊前
守吉政及ヒ輝元秀家ノ一族増田右衛門尉長盛ノ
臣石川式部之丞長束大藏太助正家ノ臣家所帶刀
銃将ニハ鉄木孫三郎弓将ニハ松浦安太夫河口久
助等其勢都合二万三千餘騎二十五日夜中ヨリ伏
見ノ城ヲ攻ム三成モ又三千ノ兵ヲ率ヒテ相加ハ
ル城中ニハ鳥居彦右衛門元忠松平主殿頭家忠内
藤弥次右衛門家長松平五左衛門近忠佐野肥後守
元綱等ヲ將トシテ関東ノ軍士義ヲ守リ命ヲ輕ン
シテ城ヲ守ル

八月朔日マダホノ暗キヨリ大坂ノ諸將一同ニ城
ヲ攻ム勝茂公五千ノ兵ヲ率ヒテ相進マル先陣ハ
龍造寺七郎左衛門家晴同市兵衛信昭神代六兵衛
家良馬場清兵衛家周鍋嶋質左衛門茂賢成富十右
衛門茂安等ナリ我公最先登ニ進マル諸軍均ク進
テ町小路屏石垣ヲ擊破リ先ヲ争テ城ニ付ケ成富
茂安鐵門ヲ燒崩シ城ニ乗入り當手ノ一番乗リト
ソ喚ハリケリ我公續テ城ニ入り各力戰シテ月見
ノ櫓ヲ乗取ル鍋嶋質左衛門土肥清右衛門大木兵
部承綏部太兵衛石井六兵衛等先登シテ一番ニ勝

茂公ノ昇ヲサシ揚タリ當家ノ臣中嶋權右衛門先
登隨ニシテ其功殊ニ抜群ナリ諸手ノ兵ヒトシ
ク乗入火ヲ懸タリ城既ニ破レテ大將鳥居元忠以
下悉ク討死ス當手ニ討取首一百餘級公ノ手ニモ
首數級ヲ討取ル諸軍一同凱歌ヲ發シテ歸ル勝茂
公毛利豊前守ト同見賞ヲ蒙ル

泰廟譜 城兵弓鉄砲ヲ放テ防戦フ事中々烈敷
カリケルニ多久與兵衛家久殊ニ進テ攻近付ク
八月大坂ノ老中秀頼公ノ命ヲ受ケテ軍ヲ勢州ニ
出テ阿野津ノ城ヲ攻ム其將タル人々ニハ毛利宰
相秀元吉川侍從廣家龍造寺簾八郎高房鍋嶋信濃
守勝茂毛利豊前守吉政長曾我部土佐守盛親中江
式部太輔真澄山崎右京亮定勝松浦安太夫家晴時
田權之助其兵都テ三萬長束大藏太夫正家軍奉行
タリ同月中旬諸軍大坂ヲ發シ勢州ニ向フ我公ヲ
始メ龍造寺ノ一族多ク是ニ從フ城主富田信濃守
信高軍ヲ督シテ稠敷是ヲ扼ク勝茂公ハ毛利秀元
ト相備ニシテ山ノ手ニ進マル夫ヨリ勝茂公軍ヲ
二ツニ分ケ一列ハ高房公ヲ大將トテ山ノ手ニ向
ハル龍家ノ一族是ニ從ヒ我公先鋒タリ一列ハ勝
茂公ヲ大將ニテ一族多ク是ニ從ヒ濱ノ手ニ向ハ
ル二十日勢州ノ野武士トモ數百人富田ヲ救ハン
トテ城ニ入ル是ヲ見テ當手ノ先鋒鍋嶋七左衛門
成富十右衛門以下ノ勇兵數人付入ニシテ二の丸
ニ乗込一番乗トソ呼ハリケリ山ノ手ニハ我公ノ
臣南里三郎左衛門城中ニ乗入我公ノ功ヲ立ント
志シ密ニ石井源左衛門ト相語ラヒ乗口ヲ見繕フ
時ニ敵兵城ヲ出テ一ツノ岡ニ屯ス其前面ハ備立
整々トシテ寄ルヘキ隙ナシ兩人潜ニ山ノ裏手ニ
附キ切岸ヲ攀登ル其時一人ノ鎧武者兩人ヨリ先
ニ這ヒ上ル者アリ是敵兵ナリト見ヘシカハ三郎
左衛門其脚ヲ捉ラヘテ登ル彼武者曰汝ハ何者ナ
ルソ南里曰味方ナリト云ツ、難ナク岡ノ上ニ攀
登リニ二士鋒ヲ並ヘ主從十余人烈敷突キテ懸リ
忽チ一陣ヲ打破ル南里ハ敵二人ヲ突伏セ從者ヲ
シテ其首ヲ取ラシム石井モ又敵ヲ討テ同音ニ一

番乗ト呼ハリ其勢ヒ奮然タリ此時野田勢兵衛等
馳来リヒトシク進ミ鋒先ヲ揃ヘテ打散ス敵兵悚
ラス本丸ニ引退ク我公進テ勝茂功ノ先陣ニ會ス
（服部内蔵允山田圓吉衛門副嶋五郎左衛門各々力
戦シテ敵數十ヲ討取ルト云）

歸國ノ後直茂公ニ士ノ勵キヲ聞召サレ御感賞
淺カラス各御褒美ヲ下サル中ニモ南里カ功ヲ
殊ニ相賞セラレ鑑（信國作）并ニ黃金五枚ヲ
賜フ當時伊勢陣ノ七本槍ト称スル内二人ハ南
里石井ナリ其餘五人ハ佐嘉ニ在リ

我公銃砲物頭田作次良左衛門下知ヲ受テ與力吉
武弥右衛門ヲ具シ夜中潮満川ヲ渡テ潛ニ乗口ヲ
見繕ヒ翌朝我公ヲ導テ其所ヨリ攻入ラシム高房
功以下龍家ノ一族多ク此口ヨリ乗入タリ是則田
代力功ナリ又大河内五右衛門ハ城中ニ乗入奮ヒ
戦テ首ヲ捕數級ナリ我公是ヲ賞セラレシカ為先
其氏大河内ヲ改テ松坂氏ト称セシム
或説二云津ノ城没落ノ後勝茂公松坂ノ城ニ向
ハル我公ヲ始諸隊將ニ從テ戰功有松坂城落
去ス大河内軍功ヲ顯シ氏ヲ改メラレシハ此役

峯權左衛門同弟宗七討死權左衛門ハ先年朝鮮ニ於テ宗七軍法ヲ背クニ依テ御勘氣ヲ蒙リ數年牢人ノ身ト成リ此儘朽果ン事ヲ歎キシカ今度兄弟潛ニ陣中ニ來リ當城ニ於テ力戰シ權左衛門ハ深手ヲ負ヒ宗七ハ討死ス我公是ヲ聞召サレ甚憐ミ玉ヒ直ニ權左衛門ヲ召シテ御勘氣ヲ許サル權左衛門大ニ悦ヒ手ヲ合セテ拝セシカ其座ヲ退テ其併死ス龍造寺三次郎カ臣吉田牟二右衛門吉次五郎左衛門モ戰死ス喜佐の木九郎兵衛疵ヲ蒙ル其他死創多シトイエトモ其交名詳ナラス

野代ニ在陣セラル我公是ニ從ハル（野代或ハ勝鳥ニ作ル長嶋城ノ河向ヒナリー書ニ勝茂公ハ合土ノ渡リニアリトモ）福嶋正則ノ居城長嶋ヲ押ヘノ為ナリトソ（此時正則閑東ニ在テ弟掃部頭是ヲ守ル）

九月十五日東西ノ軍濃州関ケ原ニ相戰フ大坂方ノ軍敗レテ諸将儘ク退散ス因テ二公野代ノ陣ヲ引拂ヒ桑名ニ出テ伊勢路甲越ヲ經テ南都ニ到ル我公殿タリ龍造寺市兵衛尉鍋嶋市佑有田八右衛門尉鍋嶋新左衛門尉等モ又殿ヲ勤ム行向キ皆敵地ニシテ野伏ノ兵群リ起テ處々ニ支ヘタリ殿ノ兵是ヲ打拂ヒ鞍刈峠ヲ經テ大阪ニ出テ玉造ノ館ニ入ラセラル衆兵難ナク歸ルヲ得シハ是我公能殿ヲ勤メ玉ヒシ功ナリト云々

下村戰功記 左馬助へ御使ヲ仰付ラレ發足セシ所ニ惣勢桑名ニ越タル由相知レケレバ公モ御取引遊ハサレ多久安順殿ヲ勸ムト

伊賀國ニ大原加右衛門ト云者アリ元ハ筒井順慶ノ家臣ナリ順慶没落ノ後浪人ト成ル此時加右衛門ハ一ツノ功ヲ顯ハシ身ヲ立ン事ヲ志シ旧好ノ者數人ヲ馳催シ伊賀路ニ赴ク途中ニテ野伏等競ヒ起テ鍋嶋公ノ退口ヲ遮ル所ニ端ナク行逢タリ大原ハ其佞野伏ヲ追退ケ公ノ全軍難ナク押通ルヲ得タリ公其功ヲ甚御感悅有テ深ク懇意ヲ加ヘ玉ヒ伏見ノ御館内ニ差居カル嶋津兵庫頭義弘立花左近將鑑宗茂使ヲ以テ勝茂公ニ申越ケルハ関ヶ原ノ一戰昧方利ヲ失フトイヘトモ天下ノ弓箭未半ナラス秀頼公正敷大阪ニ在シ其上輝元秀家及五奉行ノ輩猶世ニアリ殊ニ九州ニハ直茂清正久留米秀包等ノ如キ各其國ヲ守ル是豊臣家ニ對シ旧好アルカ故ナリ今御邊ト我同ク馳下リ旗ヲ九州ニ翻サハ秀頼公ノ本意ヲ達セン事何ノ難キ事アランイザ御一同ニ纜ヲ解カントソ申送ラル勝茂公ノ御返答ニハ我等ハ勝ヨリ下國致サン各方ニハ心次第セラレ然ルヘシト答ヘラル扱嶋津立花兩家ハ堺大坂ノ船ヲ奪

ヒ取乗テ國ニ歸ル扱モ勝茂公ハ我公ヲ始龍家ノ御一族老分ノ輩ヲ集テ仰ラル、ハ我愚ニシテ三成力陰謀ヲ悟ラス大坂ニ属シテ軍功ヲ顯ハシ畢ヌ然ハ是只内府公ニ敵對セシノミナラス家君ニ對シテモ面目ヲ失フ所ナリ一旦宿老中ノ異見ニ随ヒシモ節ヲ守リ孝ヲ盡スノ道ト思ヒ部リテニ事ナリシカドモ始終ノスル所家君ノ本意ニ背ケリ何ノ面目有テ國ニ歸リ家君ニ見ヘンヤ所詮内府公ノ檢使ヲ申請潔ク切腹セシヨリ外ナシ御邊等ノ如キ國家ニ差タル由緒アル輩ハ各所存ノ保ナルヘシト仰ラル我公曰抑御切腹ト申ハ止ヲ得サル手詰ノ時ノ御事ナリ公此度大坂ヘノ御一味ハ是則義ヲ守リ孝ヲ立ルノ筋道ニテ武門ノ本懷人道ノ常法ナリ何ソ是ヲ不忠ト云ヘケンヤ昨日ハ斯ノ如シトイヘ共今日ハ前非ヲ改メ其罪ヲ謝セラレナハ何ソ御赦免ナキ事アラン叶ハサル迄モ御断ヲ遂ラレ候ヘカシ其上ニテモ御赦免ナキニ於テハ其時社某一番ニ切腹仕ラン只今此所ニ御供仕ルモノ誰カ一人モ罷下ルモノアラン爰ヲ以テ某既ニ此事ヲ御母公ニモ申上タリ母公ノ思召モ御同前ニ候速ニ此義御決定アレカシト仰上ラル夫ヨリ久納市右衛門尉甲斐弥左衛門ヲ勝茂公ノ御使トシテ上方ニ赴カシム其時内府公御本陣ヲ大津ニ居ヘラレ石田小西安國寺等ヲ擒ニセラレシ折節ナリ御先手ノ諸軍追々ニ大坂ニ乱レ入ル輝元秀家及大坂七人ノ奉行等皆散々ニ逃走リ跡ニハ秀頼公ノミ頼ム方ナク空敷御在城ナリナ市右衛門カ功ナリ勝茂公ハ早速伏見ニ御越御信長老本田正信等心ヲ合セ申宥メシニヨリ直茂公ノ体ナリ斯ル所ニ久納等一參ニ馳下リ御赦免蒙ラレシ旨ヲ告ク是全ク井伊直政黒田長政圓光寺公ノ御貞心ニ對セラレ御高免有シトナリ且ハ久立花征伐ノ命ヲ蒙ラル因テ不日ニ大坂御発船ニ

テ御下國ナリ我公一番ニ御供ナリ御國元ハハ先達テ持永助左衛門ヲ差下サレ此度ノ落著ヲ直茂公ヘ仰越サル時ニ二十三日ナリ
多久ニハ長信公上方ノ御難義ヲ察セラレ庭木右近允ヲ上ハ乗トシテ兵糧其外差登セラル伊万里ヨリ船ヲ出シ二十六日上松浦呼子ノ津ニ到ル領主寺澤志摩守ハ関東ノ一味トシテ上方ニ在リシカ家臣入江吉兵衛ヲ頭トシテ兵船數艘ヲ以テ庭木カ船ヲ取圍ム庭木奮戰シテ敵數人ヲ討取トイヘトモ衆募對難ク右近并ニ附役久我五兵衛筒井新九深川九郎左衛門等十餘人討死ス入江モ又疵ヲ被ル船頭宇右衛門（嘉瀬ノ者）辛シテ伊万里ニ逃歸リ始終ノ次第ヲ津守庭木八郎兵衛ニ告ク八郎兵衛早速宿次ヲ以テ多久ニ注進ス長信公大ニ怒ラセ玉ヒ討手返シニ唐津ニ取懸ントテ急キ軍勢ヲ催シ篠原口ニ打出ラル直茂公此事ヲ聞付ラレ左有テハ悪カリナント使ヲ馳セテ是ヲ制セラル長信公止事ヲ得ラレス軍ヲ返サル去レハ勝茂公ニハ十月十日目出度佐嘉ニ御歸著ナリ立花征伐ノ御軍立既ニ相定リ直茂公軍勢三萬餘人ヲ率セラレ佐嘉城ヲ御進發有テ筑後ニ到リ海津安武大善寺ニ陣セラル其御備都テ十二段ナリ先陣ハ鍋嶋平五郎茂里二陣ハ後藤左衛門太夫茂綱三陣ハ須古市兵衛信昭四陣ハ我公ナリ相從フ家臣ニハ本覺坊澄仙犬塚半左衛門木下久兵衛徳永八郎左衛門田代次郎左衛門成富權右衛門西岡覺右衛門梶原喜兵衛原千右衛門以下士卒都テ一千餘人ナリ御嫡子孫四郎茂富公ニモ別ニ士卒三百餘人ヲ率ヒテ御出陣ナリ同月十八日公御使ヲ以テ御書ヲ長信公ニ遣ハサル文ニ云

今日十八日陣替被申加州父子城嶋之城江陣被申候我々陣城嶋より五町先の田に七郎左衛門殿我等六兵衛弥右衛門殿傳藏忠右衛門殿陣取申候平五郎殿陣三町先の村へ陣取被申候明日之行之義ハ未相知不申候味方殊外之大勢にて候懸御目候ハんとの申事ニ候

一 我等人數鐵炮百五十挺程御座候其外馬上手明弓鎧相加候而千程御座候諸事無油断申付候間可御心安候事
一大鉄炮入可申義も可有之候間治部左衛門江被仰付分切相火縄相至被相添持せ可御遣候事
一下岡江我等早松舟番ニ弓鉄炮之者二三十人御座候是者下岡之船を伊万里之様ニまハし為可申如斯申付候若舟まハリ候ハぬ体ニ候ハゞ毎番之者早々被召寄此方之様
二 可差遣候 恐惶謹言
十月十八日 一 判
雲芝様 参人々御中
雲芝ハ長信公の御異名一ハ我公の御名印也
既ニシテ先陣平五郎茂里其小先手舎弟七左衛門尉義賢先進テ八の院ニ至ル立花ノ代将小野和泉守鎮幸付從フ騎卒凡一萬斗リ八の院ニ打出テ我軍ヲ防ク同二十日ホノボノ明ケ兩陣相接テ戰ヲ合ス是ハ龍造寺彼ハ大友敵ト成味方ト成累年武ヲ嗜名ヲ惜ムノ相手ナリ且ハ又両家ノ存没只此一戰ニ有故ニ敵モ味方モ寸歩モ退カヌ勇ヲ振テ突戰ス両方ノ討死手負累々トシテ丘ヲ成セリカル所ニ後藤茂綱須古信昭俄ニ起テ鉄砲ヲ放シ懸横矢ヲ入ル立花ノ軍ナシカハ以テ悚ルベキ先陣忽チ敗レ立花三太夫以下名ヲ得シ勇士等數十人討死ス雜兵ヲ合セテ討取首六百餘級ナリ手負ハ其數ヲシラス大將和泉守モ疵ヲ被リテ引退ク先陣斯ノ如クナレハ立花勢残ラス八の院ヲ引退ク味方逃ルヲ追テ井手ノ橋ニ至ル爰ニ於テ撿使黒田如水加藤清正使ヲ以テ勝敗ハ見届タリ城責ハ先指扣ラレ然ルヘシトソ申送ラル直茂軍ヲ酒見ニ返サル両撿使ノ扱ニ依テ宗茂城ヲ下ル筑後一國平均ニ属ス

同二十二日如水清正太守ノ陣ニ來ラレ勝軍ヲ賀セラル柳川ノ城ハ加藤黒田ノ家臣是ヲ守リ久留米ノ城ハ當家ノ兵是ヲ守ル夫ヨリ両太守加藤黒田ト共ニ薩州ニ御発向有津奈岐美奈侯佐志岐等ノ地ニ陣セラル是ハ内府公ノ命ニ依テ嶋津ヲ征セラレンカ為ナリ我公モ御出陣ナリ然レトモ頓テ和議ニ成平均ニ依テ諸將各軍ヲ其國々ニ返サル

一向宗由緒 眼正寺草創ノ時旅僧調子ノ為諫早小田武雄多久藤津ヘ一人ツ、目代僧ヲ遣ハサル其後右五ヶ所ノ五人ノ僧ニ寺号ヲ下サル諫早安勝寺藤津専立寺武雄正法寺小田正榮寺多久顯證寺是ナリ

今号で「水江事略卷之六 安順公譜之上」は終了。次号からは「水江事略卷之七 安順公譜之下」です。

鶴山塾案内

通年講座

受講料 1回 500円

古文書教室 全10回

開講(土曜日) 6/7・7/5・8/2・9/6
10/4・11/1・12/6
1/10・2/7・3/7

時間 10:00~12:00

講師 舌間 漢吉
(多久古文書の村)

中国古典の扉 全10回

開講(火曜日) 6/3・7/1・8/5・9/2
10/7・11/11・12/2
1/6・2/3・3/3

時間 10:00~11:30

講師 武田 耕一
(公益財団法人孔子の里理事)

楽しもう短歌 全10回

開講(木曜日) 6/5・7/3・8/7・9/4
10/2・11/6・12/4
1/8・2/5・3/5

時間 10:00~12:00

講師 角本 久子
(日本歌人クラブ佐賀県幹事)

多久の歴史と文化を学ぶ講座

受講料 1回 500円

多久市の歴史や文化の紹介と継承、市民の教養の向上を目的に開催している「多久の歴史と文化を学ぶ講座」。市内外から多彩な講師陣を迎える専門的な見地から多久を学ぶことができる講座です。

令和7年度も計6回の開催を予定しており、現在、テーマや内容について各講師陣と調整を行っております。開催日時や内容は5月頃に皆様にお知らせいたします。なお、これまでに開催してきた本講座の内容は、以下のとおりです。

これまでに開催した講座の紹介（過去5年度）

令和6年度 2024	新たに見つかった石井鶴山の作品、その他について 熊本大学大学院教授 中尾 健一郎	江戸時代、多久のやきものの生産 佐賀県立九州陶磁文化館名譽顧問 大橋 康二	草場佩川の「山野一善」（其の三） 佐賀大学教授 中尾 友香梨
令和5年度 2023	草場佩川・船山のやきもの事情 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員 芳野 貴典	御家交代と龍造寺・鍋島・多久 —龍造寺長信から多久安順へ— 佐賀県立図書館主事 野下 俊樹	佐賀城内の多久屋敷 佐賀県立佐賀城本丸歴史館企画学芸課長 武谷 和彦
令和4年度 2022	石井鶴山の紀行詩 —神社仏閣をたずねる— 熊本大学大学院教授 中尾 健一郎	草場佩川の「山野一善」（其の二） 佐賀大学教授 中尾 友香梨	太古のブランド石材「多久のサヌカイト」 佐賀県文化課文化財保護・活用室主任主査 越知 瞳和
令和3年度 2021	草場船山に学んだ鹿島藩士 八沢棟之進の生涯 多久市郷土資料館学芸員 高橋 研一	戦国時代の龍造寺氏と多久 佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員 野下 俊樹	多久と蓮池 —近世佐賀藩における域内交流— 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員 芳野 貴典
令和2年度 2020	草場佩川の「山野一善」（其の一） 佐賀大学教授 中尾 友香梨	石井鶴山の「倉永先生行状」を読む 熊本大学大学院教授 中尾 健一郎	「日高取邸」と高取伊好 松浦史談会事務局長 田島 龍太
	「遺香堂繪像水滸傳」にみる 水滸伝の世界 多久市郷土資料館学芸員 志佐 喜栄	草場佩川と鹿島～文事が繋ぐ交流～ 鹿島市民図書館学芸員 高橋 研一	戊辰戦争と多久 佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員 芳野 貴典
令和3年度 2021	石井鶴山の紀行詩について 熊本大学大学院教授 中尾 健一郎	江戸中期の佐賀藩の漢学を支えた人物 —西岡春益— 佐賀大学教授 中尾 友香梨	新発見！桐野山妙覚寺の仏涅槃図 佐賀県立博物館シニア・アドバイザリー・フェロー 福井 尚寿
令和2年度 2020	幕末佐賀の石炭事情 佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館学芸員 近藤 晋一郎	奇才の子・草場船山 佐賀県立佐賀城本丸歴史館学芸員 芳野 貴典	
	佐賀城の歴史～竜造寺氏の佐賀城から鍋島氏の佐賀城へ～ 佐賀市教育委員会文化振興課主任 文化財1係主任 大平 直子	再発見！龍造寺天満宮縁起絵 佐賀県立博物館シニア・アドバイザリー・フェロー 福井 尚寿	歴史に埋もれた名医 —徳永雨卿— 佐賀大学教授 中尾 友香梨
	石井鶴山と藪孤山 熊本大学准教授 中尾 健一郎	多くの歴史的建造物の保存と活用 (株)アルセッド建築研究所建築家 清水 耕一郎	蝦夷地開拓判官・島義勇と鶴田咲 佐賀県立佐賀城本丸歴史館副館長 古川 英文

多久の百景



「梅雨の頃」(佐賀県白石町 藤松政晴)

多久百景写真コンテスト入賞作品



「ウォールアートのある町で」(佐賀県唐津市 栗田敦)

多久百景写真コンテスト入賞作品

来訪・来信・雑録

10月1日	鶴山塾「中国古典の扉⑤」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）	1月13日 李貴史一般財團法人孝道文化財団理事長、
10月2日	ゆい工房「岸川まんじゅう屋さん」 （講師…森さとみ シャンボール代表）	1月16日 顔素郷同九州支部長来訪
10月17日	鶴山塾「たのしい短歌⑤」 （講師…角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事）	1月17日 藤井倫明九州大学大学院准教授、佐藤将之国立台湾大学教授、陳裕真国立暨南国際大学教授来訪
10月27日	秋季积菜学校関係者事前練習 秋季积菜總練習	1月22日 杜金鵬氏(古琴奏者)と佐賀地区日中友好協会の皆様來訪「～中国音樂への誘い～」
11月1日	楊慶東中華人民共和国駐福岡総領事ほか來訪 ゆい工房「消しゴムはんこを彫ってみよう！」 （講師…野田宏美 消しゴムはんこ作家）	1月25日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」 （草場佩川・船山のやきもの事情）
11月7日	鶴山塾「たのしい短歌⑥」 （講師…角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事）	2月1日 鶴山塾「古文書教室⑧」 （講師…芳野貴典 佐賀県立九州陶磁文化館学芸員）
11月10日	有田町同朋保育園論語素読会 ゆい工房「折り紙で素敵な笑顔を～1年中飾れる 干支カレンダーづくり」 （講師…青柳伊都子 日本折紙協会佐賀支部長）	2月6日 鶴山塾「たのしい短歌⑨」 （講師…角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事）
11月12日	鶴山塾「中国古典の扉⑥」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）	2月15日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」 （御家交代と龍造寺・鍋島・多久・龍造寺長信から多久安順へ）
11月15日	株式会社J.A食糧さが「合格縁起米」奉納式	2月20日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」 （講師…野下俊樹 佐賀県立図書館郷土資料調査・編さん課主事）
11月17日	第29回多久市論語カルタ大会	3月1日 鶴山塾「古文書教室⑨」 （講師…舌間輝吉 多久古文書の村）
11月30日	公開講演会「正名～孔子の政治思想～」 （講師…武田耕一 公益財団法人斯文会理事長）	3月3日 鶴山塾「中国古典の扉⑨」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）
12月1日	鶴山塾「中国古典の扉⑦」 （講師…宇野茂彦 公益財団法人斯文会理事長）	3月4日 鶴山塾「中国古典の扉⑨」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）
12月3日	鶴山塾「中国古典の扉⑦」 （講師…岸川和則 塩田津ソバの会）	3月6日 鶴山塾「たのしい短歌⑩」 （講師…角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事）
12月5日	鶴山塾「たのしい短歌⑦」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）	3月8日 早稲田佐賀高等学校第3回「早稲田の聖地さが」大隈重信一〇〇年ハイク開会式
12月7日	鶴山塾「古文書教室⑥」 （講師…ゆい工房「本格蕎麦打ち(後期)」）	3月11日 東原庠舎消防訓練
12月10日	鶴山塾「たのしい短歌⑦」 （講師…角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事）	3月24日 公益財団法人孔子の里令和6年度臨時評議員会
12月12日	鶴山塾「古文書教室⑥」 （講師…舌間輝吉 多久古文書の村）	3月25日 令和6年度第1回多久聖廟保存修理検討委員会
12月15日	鶴山塾「ヨークアートで描く～しめ縄飾り～」 （講師…増本みづほ チヨークアートインストラクター）	3月29日 鶴山塾「古文書教室⑩」 （講師…舌間輝吉 多久古文書の村）
12月27日	多久聖廟法人孔子の里執務納め式	
1月1日	多久聖廟お火つき	
1月6日	多久市新年の集い(天山多久温泉TAQUA)	
1月7日	鶴山塾「中国古典の扉⑧」 （講師…武田耕一 公益財団法人孔子の里理事）	
1月9日	多久聖廟イルミネーション点灯式 公益財団法人孔子の里執務納め式	
1月11日	(講師…舌間輝吉)	
1月11日	角本久子 日本歌人クラブ佐賀県幹事 「古文書教室⑦」	
1月11日	多久古文書の村	

編集後記

猛暑の秋、嚴冬を越え、鳥啼花咲を楽しむ春、年度初めの時季を迎えました。私も新たなスタートとなります。4年間、皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。(ほ)